Technical Note 05-28
新しいフォームイベント

By Larry Sharpe, Infoservices
Technical Note 05-28

（原題: User Preferences）

概要

この Tech Note で紹介するサンプルデータベースは、05-25 のものを改良し、ユーザによって加えられたリストフォームの変更点(プリファレンス)をデータベースのテーブルに保存するようにしたものです。今回は特にプリファンスの処理に焦点をあてているので、その他の部分に関する説明については Tech Note 05-25 を参照して下さい。

サンプルデータベース

サンプルデータベースには Designer、Administrator および Test User というユーザが定義されています。ログインウィンドウが表示されるように、Designer にだけ designer というパスワードが設定されています。

[People]、[Companies]はともに前回紹介した汎用的なメソッドで制御されているユーザ変更可能なリストフォームで、その設定内容が今回のポイントである[xPreferences]テーブルに保存されています。このテーブルではリストフォームの設定に加えて Startup Table、Data Entry、Server Settings という設定項目も管理しています。

各ユーザ、編集メニューの Preferences...を選択することによって変更可能な項目にアクセスすることができ、Designer または Administrator であれば他のユーザの設定を変更することもできます。両者はクライアント/サーバ環境であれば Server Settings にもアクセスできます。この設定項目については将来の Tech Note で扱う予定です。

今回の工夫点は、コードを書き換えることによって設定項目を追加できる点、および設定を単一のテーブルに保存している点です。

コードの解説

ストラクチャ

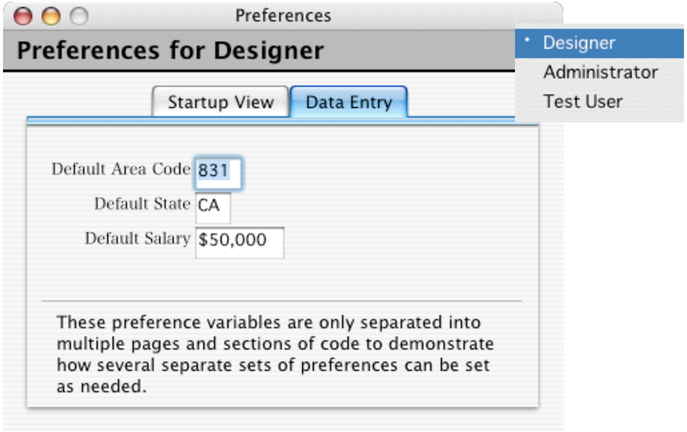
各テーブルの 1 フィールド目は非表示の ID フィールドで、データをトリガメソッドで管理しています。ユーザがリストフォームでアクセスできるのはその他のフィールドです。[xPreferences]には設定が BLOB で保存されています。BLOB を使用することにより、テ

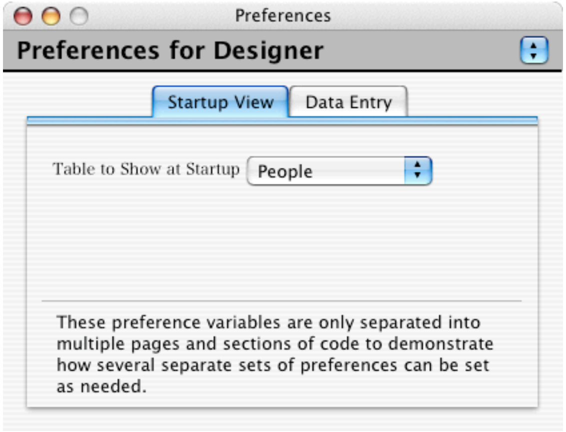
ーブルごとに異なる設定項目を同じフィールドに納めることができています。項目を追加/削除しても構いませんが、その際は読み込みと書き込みのコードを両方とも修正することを忘れないようにして下さい。

フォーム

Tech Note 05-25 で紹介した入力フォームおよび出力フォームとほとんど同じですが、前回の Output_Columns メソッドが xOutput_Columns となり、xPreferences メソッドで設定の読み込みと書き込みをするように改良されています。

リストフォームでは操作できない Startup View および Data Entry の設定ができるように [xPreferences]テーブルには EditPrefs というフォームが用意されています。これらの項目も xPreferences メソッドで使用されます。フォームのページ 0 にはユーザを切り替えるためのポップアップメニュー、ページ 1 および 2 には通常の設定項目、ページ 3 にはサーバプロセス用の設定項目が配置されています。(クライアント/サーバ環境でのみ表示)





フォームが開かれるとフォームメソッドでそれぞれの変数が定義され、閉じられるとクリアされます。ユーザがそれぞれの変数を操作した際の動作は、変数のオブジェクトメソッドで処理されています。

メソッド

On Startup

xOutput_Columns ("OnStartup")　- 必要なインタープロセス変数を定義します。
xPreferences ("OnStartup")　- 必要な配列を作成します。
xPreferences ("Load")　- 起動時に開くテーブルが設定されていれば開きます。

On Server Startup

クライアント/サーバ用の初期設定を行ないます。今回は取り上げません。

xOutput_Columns

基本的には前回の Output_Columns プロジェクトメソッドを踏襲していますが、設定を随時[xPreferences]テーブルに書き込む点が異なっています。

xPreferences project method

Case 文によってプリファレンスの制御をしています。コードにも詳細なコメントが残されているので参照して下さい。

¥ (Count parameters=0)

メソッドがメニューからコールされたことを検知し、*をパラメータとして新規プロセスで自らをコールします。同名のプロセスがすでにある場合は、既存の xPreferences プロセスに対して BRING TO FRONT が実行されます。

¥ ($command="Open")

新規プロセスとして起動した場合のルーチンで、ダイアログウィンドウを表示します。

¥ ($command="Load")

クエリを実行してユーザ用の設定レコードを探します。みつからない場合は Defaults を引数として自らをコールします。レコードが 1 件の場合はそれが読み込まれ、複数の場合はすべて削除してデフォルトのレコードを作成します。

¥ ($command="Save")

上記"Load"とは逆にユーザ用の設定レコードを保存します。

¥ ($command="Defaults")

設定項目ごとのデフォルト値が定義されています。

¥ ($command="DefineVars")

"Load"の前のコールされ、必要な変数および配列を宣言しています。

変更できるかもしれない点

今回のサンプルデータベースでは、ユーザごとにプリファレンスのレコードを作成していますが、全ユーザ用の統一設定があれば充分かもしれません。Current user 関数を固定の値に置換することによってそのように変更できます。ポップアップリストは不要になるのでそれも更新して下さい。